

池田 誠——編

北千島

占守島の 五十年



北千島
占守島の
五十年

江苏工业学院图书馆
藏书章

池田 誠 一 編

国書刊行会

編著者 池田 誠 (いけだ まこと)

1932年(昭和7年)豊橋市に生まれる。

戦車第十一聯隊長 池田末男 長男。

1995年(平成7年)北千島占守島慰霊巡拝団
に参加、文芸春秋巻頭随筆寄稿。

現在＝税理士・エルメスコンピュータ(株)社長。
著書＝『税務調書マニュアル』(ぎょうせい＝共著)

『経営に生かせるコンピュータ実務』
(ダイヤモンド社)

中小企業経営ソフト《流石》作成。

東海日日新聞等に寄稿多数。

きたちしましゆむしやとう
北千島占守島の五十年

平成九年七月一〇日 初版印刷

平成九年七月二日 初版発行

編著者 池田 誠

発行者 佐藤 今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都板橋区志村二一〇一五

電話〇三(五九七〇)七四二一

FAX〇三(五九七〇)七四二七

印刷
製本 有限会社イシグロ高速印刷

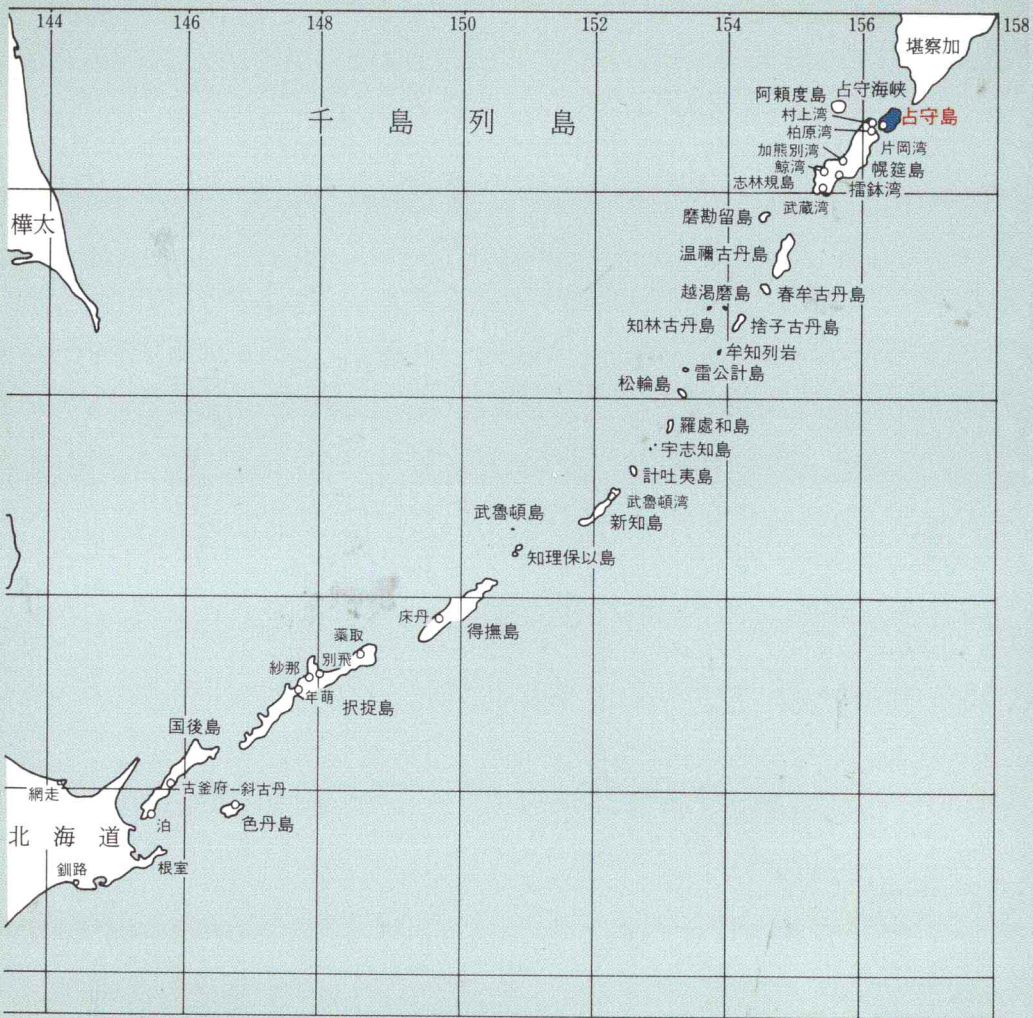
ISBN4-336-03947-X

いつしよに

日本へ還ろう









序にかえて



島
の
物
語

島の物語

石川 幸次郎

思ひだしたから、書きつけておく。

日本の北に、ロシアのカムチャツカ半島が、南に向かって垂れている。その南端から北海道まで、首飾りのように二十四ほどの島々がならんでいるのが、千島列島である。

すべて日本領だった。

いまは日露間の熱い湯のなかにある。

この島々が日本領であることは、明治八年（一八七五）に日露間で調印された「千島・樺太交換条約」によって、たとえば東京都が日本領であると同じくらいに明らかで

あった。すくなくとも一九四五年八月十八日までではある。

太平洋戦争中、この列島はアメリカ軍の航空機や艦船の南下路にあたっていたため、日本はここに守備隊を置いた。

カムチャツカ半島南端から数えると、第一島が占守島^{シムルシュ}、第二島が幌筵島^{バラムシル}で、この両島に一個師団が置かれた。

兵力はやがて他の戦線にひきぬかれたため、末期には六千ほどになった。

日本国が連合国に降伏したのは、周知のように、一九四五年八月十五日である。すべての戦場で、戦火が熄^やんだ。

ところが、信じがたいことに、降伏から三日後に戦争をせざるをえなかった部隊があった。さきにふれた八月十八日のことである。ソ連軍が占守島に銃砲火とともに侵入してきたのである。世界戦史上、例がない。

型どおりの夜襲だった。まず同日の午前一時前後、カムチャツカ半島の南端から重砲弾が飛来し、次いで艦砲の砲声がきこえ、未明、島の北端の竹田湾に侵入軍が上陸した。

おどろくべきことだった。おなじことが千葉県や山口県でおこったと想像しても、事態の質は変わらない。

当時、島には私の友人たちがいた。高木弘之、芦田章、田中章男、吉村大、木下弥一郎らだった。

みな戦車第十一連隊に属していた。連隊長は池田末男大佐で、この人は私どもが戦車学校で教育をうけていたころ、教頭のような職にあった。

いまでも、私は、朝、ひげを剃りながら、自分が池田大佐ならどうするだろうと思い、その困惑の大きさを想像したりする。サッカーのゲームがおわってから、相手チームが突っこんできたようなものである。それも三日後にある。

池田大佐は、午前一時すぎ、隣りの島の師団司令部に命令を仰ぐべく電話をかけたが、司令部もどうしていいかわからなかった。当然ながら、司令部は東京の大本営に電話をした。が、大本営も、当惑した。

くりかえすが、日本はすでに降伏している。降伏後の日本を処理すべき連合軍最高司令官はマッカーサー元帥だが、かれはまだ日本に到着していなかった（日本進駐は八月三十日）。

ソ連も、当然ながら連合国の一員であった。その一員が、いわば野盗のように侵攻してきたのである。

これほどの事態だったのに、いまはよく知られていない。戦後、この大戦についてあらゆることが書かれたが、この「占守島事件」については、私は活字で読んだことがない。

先日、なにげなくテレビをつけると、自然としての占守島が映し出された。野に、戦車の残骸がころがっていた。

「戦車ですね」

と、レポーターのつぶやきでおわり、画面はすぐ他の自然へ移った。死者たちのために当時の変事について一言あってもよさそうなものだったが、レポーターはおそらく事件そのものを知らなかったかと思える。

ついでながら、前記の私の友人たちは、木下弥一郎をのぞいてみな戦死した。戦車の残骸は、私にはかれらの死体のようにみえた。

池田大佐は、撃退することを決心した。

大佐の決心については、世の中も歴史も価値観も変わってしまった平和なこんにち、論議してはじまらない。池田末男という人は、敵を見れば戦うことを国家から教育され、そのことを義務と生きてきた。

大佐の命令によって、全車輛がエンジンをかけた。が、かんじんの大佐が搭乗する車輛だけが、夜の冷えのためか、エンジンがかからなかった。大佐は他の車輛に飛び乗って出発した。

残された大佐の車輛の操縦手の准尉は、全軍が出て行ってから、車内で拳銃自殺をした。このことも、戦前の日本における倫理的事情であって、こんにちの感覚でその死の可否を論ずる必要はない。

上陸したソ連軍は、撃退された。が、再度上陸してきた。

このため激戦になり、多くの敵味方が死んだ。池田大佐も死んだ。

八月二十一日になってようやく双方白旗をかけた軍使によって停戦が成立した。日本軍の生者はシベリアへ送られた。

以上のことは、現在のロシアを論ずる上で何の足しにもならない。

ただ、千島列島の“ロシア領化”がどのようにしておこなわれたかを、平和と繁栄の明日をめざすロシア市民たちに知っておいてもらいたいのである。知れば、どんな異常な事柄でも、両国にとって好ましい昇華を遂げるものなのである。

(一九九三〔平成五〕年十一月一日)

——『風塵抄二』（中央公論社）——

『韓かんのくに紀行——街道をゆく2』で、若き戦車小隊長が活躍する場面がある。二十三歳の司馬さんは韓国の釜山駅に降りた。

「スーッと、ケースを持って——といえ、旅情の匂う風景になるのだが、不幸にも中戦車を四輛持って降りた」(『韓のくに紀行』)

他の小隊は目的地の宿舎にすぐ向かったが、司馬さんは出遅れ、途方にくれつつ出発した。

「私の部下のひとびとほど、気の毒な軍人はなかったであろう。かれらが運命をあずけている人物がひどい方角オンチであるとは、つゆ知らず、私がときどき砲塔の天蓋てんがいをひらいてうしろをむくたびに、三輛の戦車が排気ガスをあげつつ無

「君ならどうする？」

邪気についてくるのである」

結局、ときどき戦車を止めては道を聞き、ようやくたどり着く。

「どうもあいつは防諜ぼうちやということを知らん」

と、後で叱られたそう。

四平陸軍戦車学校を卒業した司馬さんは牡丹江省石頭の戦車第一連隊第五中隊に配属され、終戦の年の春に栃木県佐野市に戻った。

同じ戦車学校の友人のうち、千島列島シムシユの占守島に配属された人たちがいる。司馬さんはよく語った。

「日本国が連合国に降伏したのは、周知のように、一九四五年八月十五日である。すべての戦場で、戦火が熄きんだ。

ところが、信じがたいことに、